

分け隔てない「ママちやま」

勇気の系譜
第3部 慈愛

沢田美喜さん

米中西部ミネソタ州で5月、白人警察官の暴行により黒人男性が亡くなった。事件に端を発して世界に議論が広がった人種差別問題について、彼女は何を思うだろうか。戦後の混乱期だった昭和23年2月、混血児の孤児院「エリザベス・サンダース・ホーム」(神奈川県大磯町)を創立した沢田美喜。当時の日本は現在よりも外国人への偏見が根強かったが、「混血児たちを救うのが自分の使命」と揺るがず、約2千人の子供を社会に送り出す。55年に78歳で亡くなって今年5月、40年となった。

これが私の使命 戦後混乱期に混血孤児院創立



子供たちとともに写真に写る沢田美喜さん
—昭和27年12月

沢田美喜(さわだ・みき)
明治34年、東京生まれ。三菱財閥創業者、岩崎弥太郎の孫。20歳でクリスチャンだった外交官の沢田廉三と結婚。外交官夫人として各国をめぐる一方、クリスチャンとしての信仰を深め、英国では孤児院でボランティアとして奉仕活動を行った。敗戦後の昭和23年、神奈川県大磯町に混血孤児のための孤児院「エリザベス・サンダース・ホーム」を創立。55年5月、旅行先のスペインで死去した。



そんな時代に混血児を引き取った沢田。「聖母」を連想させるが、ホームの子供たちの印象はちよつと違つた。怖かったね。朝、コソコソとハイヒールの音がすると、「ママちやまが来るぞ」と、みんなにワイワイしていても、みんな固まるんですよ。

黒人の父と日本人の母の間に生まれ、生後2カ月だった昭和31年春、ホームに預けられた森博(64)は、アルバムを手に笑う。森をはじめ、やんちゃ盛りだった子供たち。悪さをすれば宿舎にいる保母に叱られ、それでも言うことを聞かなければ、沢田が執務を行っていた母屋へ行くのが決まりだった。母屋に入ってふすまが開いたら、ビンタ一発。大きな指輪をしているから痛いものなの。でも叱られるのも分け隔てなかったね。

そんな森はホームの小学校卒業式で、沢田から卒業証書とともに、おねしよを克服したとして「よくがんばったで賞」をもらった思い出もある。子供が100人はいたかな。でも、ママちやまほどの子がどつという性格でどつだといつのを、見ていないよ。日本人とは異なる顔立ちや肌の色。16歳でホームを卒業し、社会へ出てからは周囲の視線や露骨な態度を感じることも度々あった。それでも屈折することなく日本人として生きてきた。

あそこ育てたから今がある。あんな自覚している。僕のような黒人も、白人もいたけど、みんな同じ釜の飯を食った仲間。だれかに差別されているというのを意識せずに育ててもらった。

鳥の親は巣を何往復もするでしょ。ママちやまは、そついうイメージ。年がら年中出かけていても、餌を運んでくれる。とにかくよく働く人だったし、えこひいきもなかった。「僕のお母さん」という言い方じゃなくて、ママちやまは「みんなのお母さん」なんだよ。

(敬称略)

平等は愛のもつとも固いきぎすなだ

ゴットホルト・エフライム・レッシング(劇作家)

沢田を唯一の母と慕つ、岡村正男(58)も同じ気持ちだ。へその緒が付いた状態でホームに預けられた岡村。約10年前、役所から届いた死亡通知で初めて実の母親の存在を知った。それまでも探すこと

「今日は帰りが遅くなる」と聞いたら、うれしかったよ。厳しさもあったし、うつつしさを感ずることもあったね

毎朝、スーツにハイヒール姿で黒塗りの車に乗り込み、ホーム運営の金策などのために奔走していた沢田。普段はホームの保母ら職員が直接世話にあたったが、子供たちの脳裏に深く刻まれているのは、厳しくとも信頼できる存在だったママちやまの姿だ。

沢田の訃報に接した際には、仕事を手につかなくなるほど動揺した岡村。還暦を間近にした大の男は、いまだに母を恋い慕つ。